

---

## 望ましい集団形成のための話し合い活動 －教育ファシリテーションの多様な支援を通して－

須藤 宣之  
(児童生徒支援コース 13502007)

---

### 1 問題

#### (1) 中学校特別活動の現状と課題

##### ①現状

特別活動は様々な体験を通して生徒が成長していく時間である。特に毎週の学活の時間にはたくさんの話し合いが行われる。年度や学期の初めには学級組織や役割分担をする話し合いをする。行事の前には話し合いにより準備の計画をしたり、学級全体の目標に好いて考えたりする。また、クラスの中に課題があれば、それを取り上げて全員で話し合うということもよくある。役割を決めていくものから、自分たちで課題に対する解決策を出し合うものまで、多種多様な話し合いをしていく必要があり、特別活動に話し合いは欠かせないものと言える。

しかし、生徒によっては、一言も発言をしないまま、話し合いが頭の上でやりとりされ、最後まで参加できないということもある。何度話し合いをしても、このような生徒には話し合いによって向上が期待できる力が、なかなか身についていかない。

##### ②課題

平成 20 年の中教審答申において、特別活動の課題が指摘された。社会状況の変化を背景とした経験不足から、生活上の諸問題を話し合って解決する力が不足していることや、好ましい人間関係を築けず、望ましい集団活動を通じた社会性の育成が不十分であるということ。また、「特別活動の充実は学校生活の満足度や楽しさと深く関わっているが、それらが児童生徒の資質や能力の育成に十分つながっていないということ、などが指摘された。

##### ③主題設定の理由

学習指導要領(2008)には、特別活動は「望ましい集団活動を通して」目標を達成することが示されている。また、同解説(2008)では「望ましい集団活動」を進めることそのものが特別活動の特質であり、目標を達成するための方法原理であるとしている。しかしながら、特別活動には多くの課題があり、「望ましい集団活動」の達成は難しい状況にあると言える。

そこで、特別活動の課題を解決するために、その特質であり、方法原理でもある、「望ましい集団活動」を追求することが必要であると考え、「話し合い活動」を工夫・改善していくことで、望ましい集団の姿に迫っていけると考え、本主題を設定した。

## 2 研究の目的と目指す生徒像

### (1)研究の目的

本研究では「望ましい集団」像を明確にし、話し合い活動を通して、その姿を追究し、特別活動の目標に迫ることを目的とする。

本研究の話し合い活動で重きを置いているのは、話し合いによって、「どのような結論を出すのか」という部分ではない。話し合いによって課題を解決していく「過程」に重きを置き、その過程において、主体的な参加のできる場作りをし、生徒誰もが話し合いに参加し、解決に主体的に関わり、自分の力で解決したという実感をもたせるようにしたい。その実感を次の話し合いへの意欲付けとし、円環的な参加へとつなげていく。その中で、生徒の自己変容を促したり、他者理解を深めたり、また、協力し合う関係作りをしたりすることが、「望ましい集団」像へとつながっていくと考える。

つまり、話し合いの場面で、どのようなファシリテーションを行うことが、「望ましい集団」へと近づいていくのか明らかにすることが、本研究の目的である。

### (2)目指す生徒像

自他を互いに尊重し、自分やクラスの課題を解決するために、協力し合う話し合いができる生徒。



本研究における「望ましい集団」

集団の各成員が互いに人格を尊重し合い、個人を集団に埋没させることなく、それぞれを認め合い、伸ばしていくとともに(個々の集団へのかかわり方)、民主的な手続きを通して、集団の目指すべき目標や集団規範を設定したり、互いに協力し合って望ましい人間関係を築けたりする集団(集団としての態度)。

話し合いにかかわる内容で具体化すると、次のような姿である。

#### 【個々の集団へのかかわり方】

- ・話し合いの場で自分の意見を安心して述べられる雰囲気があり、活発に意見が言える。
- ・他者の意見を無下に否定することなく、しっかりと傾聴することで建設的な話し合いをしようとする。

#### 【集団としての態度】

- ・話し合いで決められたことを学級全体で大事にできる。
- ・話し合う過程を通して自己理解や他者理解を深めている。
- ・学級への所属感や学級の成員同士の連帯感がある

## 3 研究の方法と計画

### (1)研究の方法

本研究は「教育ファシリテーション」の技法を用いる。ファシリテーションとは、星野(2013)によると、「対象となるものが、直面しているさまざまな障がいを、自ら取り除き、目標達成を進めていけるように、援助促進することである。」と定義されている。

本研究における教育ファシリテーションとは、話し合いの場をうまくすすめていくための支援のことを指し、介入の工夫、方法の工夫の2つを行う。

### ①介入の工夫

「教示的介入」「黙示的介入」「協働的介入」「委任的介入」の4つの介入の工夫を、生徒の状況や話し合いの目的に応じて、適切に選択する。

### ②方法の工夫

ワールド・カフェ方式や、ジグソー方式、ペアインタビュー、ギャラリートークなどの話し合いの形態の工夫のことを第一義に指す。また、二義的に環境の整備も指す。具体的には、付箋や模造紙を用いることで話し合いを可視化したり、座席レイアウトを工夫したりすることなどである。いずれも話し合う時期や内容などに注意を払って選択する。

### (2)検証方法

本研究は、効果検証として、質問紙による13項目のアンケート調査(計3回)、およびhyper-QU(5月・10月の2回)のデータを用いる。

表1 質問紙の項目(①から⑧は個人のスキル、⑨～⑬は集団の認知)

①クラスで課題に取り組む時、周りの人と協力することが大切であると思う。	⑨このクラスは、クラスの人が協力してものごとに取り組んでいる。
②自分の考えを深めるためには、友達の考えを聞くことが大事だと思う。	⑩このクラスは、クラスの人意見や考えを聞こうとする姿勢ができています。
③みんなで協力している時は、自分の意見を言うことが大事であると思う。	⑪このクラスは、自分の意見を言える人が多い。
④友達と協力することで、困難なことも解決しやすくなると思う。	⑫このクラスは、みんなで考えるべきことは、みんなで協力して解決している。
⑤友達と作業や仕事をする時に、どのようにしたらうまくいくか分かる。	⑬クラスの話合いに満足している。
⑥班やクラスでの活動をする時に、友達の意見を聞きながらできる。	
⑦自分の考えを、全体や班での話し合いの場で言うことがある。	
⑧班活動などでものごとを進める時は、友達と協力して進めようとしている。	

### (3)研究の計画

実態をアンケート調査によって調査し、主な学級の課題を⑤⑩⑪⑬の4点ととらえ、以下のような計画を立てた。実践を基礎期と発展期に分け、基礎期①で話し合いの基礎となるスキルを身につけ、基礎期②で他者との関わりのスキルを身につけ、発展期でそれらを生かして話し合いが進められるように計画した。

表2 研究計画表

基礎期①	1	4月8日	学級委員を決める話し合い	教示的介入	小グループワークシートの活用	⑤⑦	4/11 アンケート①
	2	4月9日	生活班を決める話し合い	教示的介入 協働的介入	一斉前向き型・ペア司会の手順の提示	⑤⑦	
	3	4月10日	係を決める話し合い	協働的介入	小グループワークシートの事前配布	⑤⑦⑧	
基礎期②	4	5月13日	学級の課題の解決策を考える話し合い	協働的介入	小グループ模造紙	①②③⑦	5/9 QU ①
	5	5月26日	学級の課題を出し、解決策を考える話し合い	委任的介入	小グループ付箋	①②③⑥	7/1 アンケート②
発展期	6	9月12日	より良いクラスにするための3つの宣言を考える話し合い	委任的介入	ワールド・カフェ方式	⑧⑪	10/30 QU ② 11/13 アンケート③
	7	10月8日	班ごとに課題を解いていく話し合い	委任的介入	小グループ課題解決型	④⑨⑫	
	8	11月13日	行動目標を決める話し合い	協働的介入	ワールド・カフェ方式	⑧⑩⑪⑫	

#### 4 実践 本研究では8つの実践を行ったが、ここでは実践5を紹介する。

「学級の課題を出し、解決策を考える話し合い」

・26年5月26日第1校時実施 【委任的介入】

##### (1)話し合いの概要

生徒から「先生、花の世話係は、教室に花がなくなってしまったので、仕事がありません。それと、集配係が毎日配るのが大変そうです。何とかありませんか。」という声があった。そこで、クラスの課題を自分たちで挙げさせ、その改善策を考える話し合いを行った。課題を挙げるために、まず、7.5cm 四方の付箋に枠を印刷して、各自に2枚ずつ配布し、(図1上)各自が今クラスの課題だと考えていることを記入させた。その後班になり、付箋をワークシートに貼りながら発表させ、課題を出し終えたところで、次の付箋を配布した。(図1下)こちらの付箋には、課題点をどうしたら解決できるかを記入させた。このような付箋を用いることで、話し合いの手順を示す効果や、思考が整理しやすくなる効果がでると考えた。



図1 思考の整理を助ける付箋

##### (2)話し合いの実際(男子14名、女子12名、計26名で実施)

話し合いが始まるとほとんどの生徒が付箋に課題を記入した。挙げられた課題は、「昼休みの過ごし方」「集配係」「宿題チェック係」「ロッカーの使い方」「係全体」など実に17項目にものぼった。

付箋を添付するワークシートを配布し、一緒に「解決への知恵」と書かれた改善策を記入する付箋を配布した。課題が書かれた付箋のまわりに「解決への知恵」が書かれた付箋が貼られ、課題の具体的な改善策について話し合うことができた。

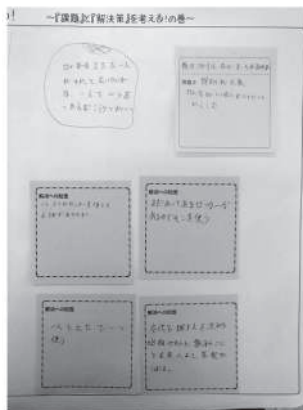


図2 ロッカーの使い方係の改善案

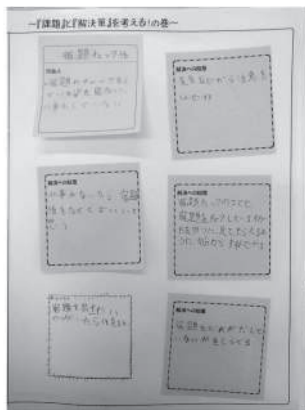


図3 宿題チェック係の改善案

「係全体」を課題に挙げてその改善策を考えていた班は、最終的に係の再編案を考えるにいたった。仕事量の軽重を議論しながら、付箋の横に表をまとめていった。後日、この表をもとに係の再編を行った。(図4)

どの課題も生徒発信のものだったので、熱心に解決に取り組んだ。個人的な悩みや課題などにも、親身になって方策を考えている姿が見られた。付箋を用いたことは、思考が整理と、操作可能という点で、話し合いの有効な手段になることが確認できた。話し合いへの積極的な参加が、自分たちで学級を運営するという意識につながり、係の再編にまで結び付いと考えられる。

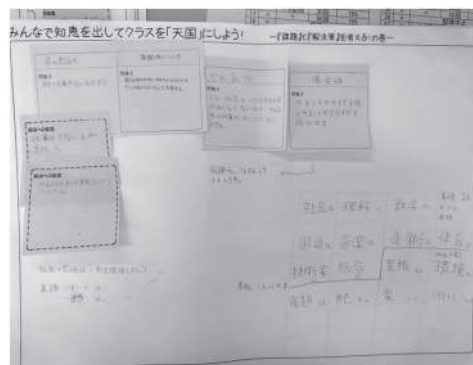


図4 係の再編に挑戦した班のワークシート

## 5 検証

### (1) アンケート調査による検証

質問紙によるアンケート調査を、生徒を対象に3回行った結果を表3に示す。一要因被験者内分散分析を行った結果、「個人のスキル(Q 1～Q 8)」( $F_{(2,48)} = 8.029$ ,  $P < .01$ )、「クラスの認知 Q 9～Q13」( $F_{(2,48)} = 4.791$ ,  $P < .05$ ) とどちらにおいても有意な変化が認められ、第1回と比較してその後の測定では得点が上昇していることが示された。

表3 測定値の比較

	4月		7月		11月		F
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
Q1-Q8合計	33.42	4.31	35.38	3.14	37.12	3.91	8.029 **
Q9-Q13合計	19.00	4.60	20.38	3.53	21.80	3.63	4.791 *
Q1 クラスで課題に取り組む時、周りの人と協力することが大切であると思う。	4.62	.496	4.85	.368	4.88	.440	2.891 +
Q2 自分の考えを深めるためには、友達の考えを聞くことが大事だと思う。	4.46	.761	4.85	.368	4.92	.277	5.940 **
Q3 みんなで協力している時は、自分の意見を言うことが大事であると思う。	4.42	.703	4.46	.582	4.88	.440	6.488 **
Q4 友達と協力することで、困難なことも解決しやすくなると思う。	4.46	.582	4.73	.452	4.76	.663	2.214
Q5 友達と作業や仕事をする時に、どのようにしたらうまくいくかわかる。	3.58	.945	3.81	.849	4.28	.980	5.098 **
Q6 班やクラスでの活動をする時に、友達の意見を聞きながらできる。	3.96	.824	4.38	.804	4.60	.645	5.929 **
Q7 自分の考えを、全体や班での話し合いの場で言うことがある。	3.88	1.071	3.88	.816	4.28	.891	2.471 +
Q8 班活動などでものごとを進める時は、友達と協力して進めようとしている。	4.04	.774	4.42	.758	4.52	.653	3.866 *
Q9 このクラスは、クラスの人が協力してものごとに取り組んでいる。	4.12	.993	4.35	.977	4.52	.918	1.972
Q10 このクラスは、クラスの人の意見や考えを聞くという姿勢ができていく。	3.77	1.032	3.85	.881	4.48	.714	5.945 **
Q11 このクラスは、自分の意見を言える人が多い。	3.58	1.206	4.00	.800	4.32	.748	4.405 *
Q12 このクラスは、みんなで考えるべきことは、みんなで協力して解決している。	3.92	1.164	4.19	.981	4.44	.870	2.702 +
Q13 クラスの話し合いに満足している。	3.62	1.134	4.00	.938	4.04	1.060	2.000

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .1$

表4 QUの学級平均点の比較

	1回目平均	2回目平均	変化
友人との関係	18.27	18.52	0.25
教師との関係	16.77	18.12	1.35
学級との関係	17.85	18.36	0.51
承認得点	39.27	41.64	2.37
被侵害得点	14.96	14.12	-0.84
配慮	32.85	33.6	0.75
かかわり	29.23	29.48	0.25

### (2) hyper-QUの結果における生徒の変容

友人との関係、学級との関係、承認得点、被侵害得点などは得点の上昇が見られた。一方で配慮、かかわりの得点は他と比べると、微増にとどまった。

## 6 考察

検証の結果、主な学級の課題として挙げた⑤⑩⑪⑬の4点はいずれも得点が上昇し、統計的な有意差も認められた。この結果は、本研究で行ったファシリテーションにより、話し合いのスキルが身につく、話し合い活動を活発に行うことができたことを示している。そして、集団の認知についても得点が上昇していることから、「望ましい集団」に近づけたと考えられる。それは、QUにおいて、多くの項目で得点が伸びた結果からも言える。

しかし、「かかわり」の得点は微増するにとどまった。ここからは本実践の課題が見える。本実践を通して、学級として生徒個々の関係が変容しても、かかわりのポイントが大きく上昇することはなかった。「望ましい集団」に近づくことはできたが、あくまで話し合いの場において近づいたのであり、QUの結果は、話し合いの中で関わることと、日常生活の中で関わることは、似て非なるものである可能性を示唆している。

主な引用・参考文献

文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説 特別活動編  
 国立教育政策研究所(2012) 平成24年度 全国学力・学習状況調査【小学校】報告書 153-158  
 徳田太郎(2010)「かかわり」のファシリテーション 世界をつくり・かえる技術」茨城NPOセンター・コモンズ  
 津村俊充・星野欣生編(2013) 「実践人間関係づくりファシリテーション」金子書房 11